

天文ナンバーワン物語 [I]

歴史の中の天文古記録

天文の古記録のなかには、それが計算で確認できるもの(日食・月食・星食・惑星現象・周期彗星・星の出入など)とそれがむずかしいもの(一過性の彗星・流星・太陽黒点・赤光など)とがある。以下では最古の記録の点にはこだわらず、なるべく確実な記録を、東西の天文史書からえらんで掲げる。

○星食 前漢の宣帝の本始4年7月甲辰(3日)、辰星が翼にあって、月がこれを犯した。(『漢書天文志』にある記事で、B.C. 70 VIII 4の夕方、水星(0.4^m)が月(月齢2.2^d)のほぼ中心を貫いた。)

○月星の犯 B.C. 295 XII 21, 第10時のはじめ、月のとがった北端が、さそり座の前面の星ぼしのうちでもっとも北にある星をかすめた。(『アルマゲスト』にある記事で、同日午前5時ごろ、β Sco が有明月(25.0^d)の北端の外0°16'のへんを通った。)

○皆既日食 魯の桓公の3年7月壬辰朔(1日)に日食があり、皆既食であった。(『春秋左氏伝』にある記事で、B.C. 709 VII 17, 午後3時すぎ魯都曲阜で皆既であった。オッポルツェル日食表のNo. 1176。)

○皆既月食 バビロンのMardocempadの第1年のエジプトThoth月の29/30日の夜に皆既月食があった。アレキサンドリヤ時で食甚が夜半前3時間1/3であった。(『アルマゲスト』にある記事で、B.C. 721 III 19夜の皆既食、オッポルツェル月食表のNo. 741。)

○惑星直列 漢元年冬10月、五星が東井にあつまった。(『漢書高帝紀』にある記事で、実際にはB.C. 206 VI~VIIIの間に火星を除く水・金・木・土の4惑星がつぎつぎにふたご座(東井)に入宿したことに対応する。漢元年10月はB.C. 207 XIだから記事に幾分の作偽が見られる。)

○超新星 後漢の中平2年10月癸亥(28日)、客星が南

門中に出た。大きさはむしろの半分程、五色に喜怒し、やがて小さくなり翌年6月に消えた。(『續漢書天文志』にある記事で、A.D. 185 XII 7の夜ケンタウルス座に現われた推定光度-8^mの超新星。)

○流星雨 魯の庄公の7年4月辛卯の夜、恒星は見えず、夜中に星の隕つること雨のごとし。(『春秋左氏伝』にある記事で、B.C. 687のこと。)

○ハレー彗星 魯の文公の14年7月、彗ありて光芒四出して北斗に入る。(『春秋左氏伝』にある記事で、Chang(張)によれば、このときのハレー彗星の近日点通過日はB.C. 615 VIII 1 U.T. という。)

○太陽黒点 前漢の河平元年三月己未(19日)、日出でて黄、黒氣あり、大きき錢の如く日中にあり。(『漢書五行志』にある記事で、B.C. 28 V 9の記録。)

○太白昼見 前漢の高後の6年春、星が昼に現われた。(『漢書高后紀』にある記事で、B.C. 182 II 3に金星は西方最大光輝(-4.4^m)であった。)

○隕石 前漢の恵帝の3年、隕石が縣諸に一つあった。(『漢書五行志』にある記事で、B.C. 192のこと。)(K.S.)

◇ 1月の天文暦 ◇

日	時	記	事
3	1	地球	近日点通過
6	7	小寒	(太陽黄経 285°)
6	13	下弦	
7	3	水星	留
14	14	朔	
14	14	月	最速
16	12	水星	内合
21	0	大寒	(太陽黄経 300°)
22	15	上弦	
27	19	水星	留
28	20	月	最近
29	7	望	

◇ 1月の日月惑星運行図 ◇

